

志は民間に在り

栄一の大蔵省辞任は、大蔵大輔である井上馨と司法卿である江藤新平との対立に巻き込まれた感が強いのですが、栄一はこれ以前から、日本における官尊民卑の弊があまりに大きく、何とかしてこれを解決したい、商工業の進歩を図り、商工業者の地位を高めたい、と考えていました。それには自らが進んで商人になり、それを実践していくしかない、と決断したのです。



▲井上馨(渋沢史料館提供)

大蔵省を去るに当たり、栄一は井上と連名で『財政改革に関する奏議』という一大文章を太政官に提出します。国政の要諦は民力の向上にあるとの立場から、各省各官が功を競って、ともすれば無駄遣いの多い現状を批判し、これを人民に負担させることの不可なることを戒め、

收支のバランスに気を付け、確固たる予算制度を確立することが急務であることを訴えます。こうした提言を受ける形で、明治六年(一八七三)六月には、大蔵省事務総裁大隈重信の下、国内初の『会計見込表(歳入歳出予算表)』が作成・公表されることになりました。

栄一の民間転出を危惧した人に、大蔵省の先輩で親友でもあった玉乃世履(のち大審院長)がいます。玉乃は、「渋沢ともあるう者が金銭に目がくらんで卑しい商人になる」といって、決して不法不義なことはせず、徳を失わないようにするつもりであり、『論語』の教えをもって身を処していく覚悟である。栄一は、玉乃に対して固い決意を語ります。『論語』とさばんの両立、道徳と経済の合一を目指す、栄一の果敢な挑戦の始まりです。

物語の手引き

【井上馨】(1835 - 1915)

旧長州藩士。後に外務・内務・大蔵などの各大臣を歴任。外相時代、不平等条約改正のため、鹿鳴館に代表される欧化政策に奔走。栄一にとっては最も親密な人物でした。

【江藤新平】(1834 - 1874)

旧佐賀藩士。明治政府では司法卿(法

務大臣)として民法編さんなどに尽力しました。

征韓論を唱え西郷隆盛らと政府を去り、明治7年に民撰議院設立建白書に署名。佐賀の乱を起こし、処刑されました。

【玉及世履】(1825 - 1886)

旧岩国藩士。剛毅果敢・清廉潔白な人柄で、その公正な裁きにより、『明治の大岡越前守』と賞賛されました。



【第20回】

キラリ 熱・中・時・間

～いきいき隊(深谷交通安全協会)～



小暮捷一隊長

まちの交通安全広報隊

交通安全に関する指導技術を競う『交通安全教育コンクール』。その関東管区大会に昨年11月29日、埼玉県代表として出場したのが、「いきいき隊」です。市内の団体がこの大会に出るのは初めて。40代・50代が多い参加者の中で、平均年齢72歳という異色のチームながら、交通安全をテーマにした劇を熱演。見事、関東管区警察局長特別賞を受賞しました。劇中で描いたのは、グラウンドゴルフに集まる高齢者。実際にあった事故事例を交えた分かりやすい物語と、観客を巻き込むパフォーミングで、会場から笑いが絶えない舞台となりました。

交通安全に関する指導技術を競う『交通安全教育コンクール』。その関東管区大会に昨年11月29日、埼玉県代表として出場したのが、「いきいき隊」です。市内の団体がこの大会に出るのは初めて。40代・50代が多い参加者の中で、平均年齢72歳という異色のチームながら、交通安全をテーマにした劇を熱演。見事、関東管区警察局長特別賞を受賞しました。劇中で描いたのは、グラウンドゴルフに集まる高齢者。実際にあった事故事例を交えた分かりやすい物語と、観客を巻き込むパフォーミングで、会場から笑いが絶えない舞台となりました。



▲関東管区大会(会場:新潟県)の様子
 左から内田果式さん、金田清さん、小暮捷一さん、塚本千代松さん、大澤晴子さん

「今はアドリブが飛び出すほどだけど、初めは、ボロボロだった」。隊長の小暮さんは、結成当時を振り返ります。いきいき隊は、平成23年10月、同コンクールの東北大会へ出場するため、深谷交通安全協会の会員で結成されました。間もなく市内の式典で初お披露目となりましたが、セリフを忘れるな

*関東管区：茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、神奈川県、新潟、山梨、長野、静岡の10県

ありがとうの手紙



優秀賞
 一般の部

優しさを教えてくれた妻へ

本田 松本淳一さん

「俺、夢でも見ていたのかな? 多くの人に来てくれて幸子の葬式をしたんだよ。」

私は真っ白な光の中に佇む妻に話した。妻は「あなたはとても疲れているのよ。もっと休んで!」と言ってくれた。

家中の掃除や家族全員の洗濯はいつも手早くこなしてた。得意な料理は毎日楽しみだった。周りの誰にも親切だった。妻は何より私の体調を亡くなってからも気遣ってくれた。

共に歩んだ二十七年間、優しさを教えてくれて、ありがとう。

情熱 農力



味で恩返し

井田 秀代さん(31歳・針ヶ谷)
 真由美さん(25歳)

家族経営の井田ファームを支えている秀代さん・真由美さん姉妹。180匹の母豚と生まれてから出荷するまでの豚の飼育全般を担っています。2人が一番大変と話すのは豚舎の清掃。きれいな状態を保つために1日2回欠かせません。「でも、においは出てしまいます。周囲の理解に感謝し、味で恩返しをしたい」。そのため、飼料にこだわり、穀類やハーブの配合率を研究。「お肉が苦手な子も喜んで食べてくれる」と、ほほ笑みます。その笑顔に、自信と責任感をのぞかせました。

*本コーナーの全編を通じて、登場する人物については、歴史上の人物としてその敬称を略します。また、年齢については、当時の通例に従い数え年の表記とします。